

初学者大歓迎!

東京池袋
『資本論』を読む会
第1巻学習会

資本主義的生産過程で は生産諸要素はどんな 資本として現われるか

不変資本・可変資本という
のは、生産手段と労働力と
いう二つの要素が価値増
殖過程で果たす異なった
機能の特徴づける資本の
名称なのじゃな



8月10日(土)午後6時から9時まで
西池袋第二区民集会室 豊島区西池袋3-8-20 JR池袋駅西口から徒歩12分

【範囲】 第3篇「絶対的剰余価値の生産」
第6章「不変資本と可変資本」後半(第17段落から)

前回(6月8日実施)、第6章「不変資本と可変資本」の第6段落から第16段落まで学習しました。

月1回のペースで読み進めているので1か月後は7月なのですが、事情により7月をパスしました。次回は8月10日になります。よろしくお願いします。

本章の案内は何回も行なっていますので、別の視点から本章の意義について触れてみたいと思います。

第1章「商品」の第1と第2節で、商品とは何か考察されました。商品の価値については、その実体が抽象的人間労働であることが明らかにされました。それは諸商品の交換関係の考察から導き出されたものでした。すなわち諸商品が交換されるとはということなのか、商品の価値の実体は何であるか、価値の大きさはいかに規定されるか、ということだけが大事でした。例えば綿糸という商品生産物が生み出されるまでには何段階もの生産過程があります。生産手段の綿花や紡錘にもすでに労働時間が支出されており、それらの労働時間が加えられて綿糸価値として結実しているのですが、結果だけが問題であってプロセス自体は問題外でした。

これに対し第5章および本章で考察されるのは直近の生産過程です。綿糸を生産する過程が分析されるのですが、ここでは商品価値の形成がいかに行なわれるかということ、つまりプロセスが問題になります。それは第一に、紡績過程の生産手段となった綿花や紡錘の価値がいかにして生産物に移されて商品価値の成分となるのかということであり、第二に、新たな労働がつけ加えられて新価値が形成されるなかで剰余価値がどのように生み出されるか、ということです。この二つの問題を正しく理解するためには労働の二面性からの把握が、すなわち具体的有用労働と抽象的人間労働という二側面からの生産過程への接近が不可欠です。

『資本論』は決してやさしくはありません。だから一緒に学ぶ意義があるのです。ともに学びましょう!

<裏面は前回学習会の報告です。参考にぜひお読みください>

【学習会報告(6月8日実施)】

6月8日(土)に学習会を行い、第6章「不変資本と可変資本」の続きをやりました。

第6章 不変資本と可変資本(2回目)

1 前回問題になった点の再議論——「労働者は同じ時間に二重に労働するのではない」の意味

前回、第6章に入り、第5段落まで進んだのですが、第3段落のはじめの文章の解釈に悩み、あれこれ議論しました。しかし納得ゆく結論を得られず、今回は、まずこの問題から議論しました。

改めて問題の文章を引用します。

「労働者は同じ時間に二重に労働するのではない。一方では自分の労働によって綿花に価値をつけ加えるために労働し、他方では綿花の元の価値を保存するために、または、同じことであるが、自分が加工する綿花や自分の労働手段である紡錘の価値を生産物である糸に移すために労働するわけではない。そうではなく、彼は、ただ新たな価値をつけ加えるだけのことによって、元の価値を保存するのである」(原書213頁。アンダーラインは引用者)

筆者は、前回の学習会報告に大要次のような私見を書き、議論のたたき台にして欲しいとしました(詳しくは、前号を参照のこと)。

〈第一に、新たな価値をつけ加える労働と生産手段の価値を生産物に移転する労働という二種類の労働があって、それらが同時に別々に行使されて価値付加と価値移転が行なわれるのではない、ということマルクスは言わんとしているのではないか。

第二に、マルクスは、直接的に生産手段の価値を移転する「価値移転労働」というものがあるのではなく、価値移転はあくまでも使用価値を生産する「具体的有用労働」に従属する問題である、とマルクスは指摘しているのではないか——これを〔意見A〕とします。

要するに、この意見は①価値付加(価値創造)と価値移転は別個の二種類の労働によってではなく、単一の労働によって行なわれるということ、②価値移転は現実に生じることだとはいえ、同一労働の具体的有用労働という側面から説明されるべきである、というものでした。

これには次のような意見が出されました。

「同じ時間」というのは同時という意味ではなく、一定の幅を持った時間であると解釈すべきである。



労働者は、同じ時間内のある時間には価値を付け加えるための労働をし、別の時間には価値移転のための労働をするのではない、とマルクスは言っているのではないか。マルクスは、このような意味での労働の二重性を否定しているだけであって、すぐ後で彼が、抽象的人間労働と具体的有用労働という労働の二面性と価値付加と価値移転という結果を結びつけているように、むしろ「労働の二重性」を強調している——これを〔意見B〕とします。

まず引用された文章の「労働の二重性」についてですが、〔意見B〕のようにある時間帯の異なった時間に価値付加労働と価値移転労働が行なわれるという意味なら、このように労働が行なわれるのではないことは明らかです。でも「同じ時間」が〔意見A〕の言うように「同時」という意味だとするなら(同じ段落のすぐ後に「労働者が同じ時間にはただ一度しか労働しないのに」とある)、どうなるでしょうか。同時であっても、この二種の労働が独自に行なわれるという意味ならば、これも誤りであることは明らかです。〔意見A〕と〔意見B〕とでは「同じ時間」の解釈に違いがあったものの、「二重に労働するのではない」は、価値付加(価値創造)と価値移転のための二種類の労働が別個に行使されるのではない、という意味だということ意見が一致しました。

つぎに問題になるのは〔意見A〕②に関するもので、価値移転を直接的目的とした労働があるのかどうか、です。

マルクスは、直後に「同じ時点に、彼の労働は、一方の属性では価値を創造し、他方の属性では価値を保存または移転しなければならないのである」と述べています。「一方の属性」とは抽象的人間労働のことであり、「他方の属性」とは具体的有用労働ことです。価値の保存・移転は具体的有用労働による使用価値の形成の結果として生じる事態であって、価値移転を直接の目的とした労働があるわけではないというのが、〔意見A〕②の趣旨でした。

これには、価値を付加する労働＝価値形成労働というものが認められるように、価値移転労働というものが認められるとの反論がありました。

筆者が〔意見A〕②を主張したのは、マルクスが「価値移転労働」なる語句を行使してあれこれ論じているのを知らないこともあって(これには、使っている場合があるとの意見がありました)、価値移転労働なる概念を振り回すことに抵抗感があつたからです。というのも具体的有用労働の作用は価値移転ということに収まらないからです。具体的有用労働の意義は何よりも使用価値あるいは有用効果をもたらす労働だという点

にあります。そして価値移転は使用価値の生産に従属した問題だとも言えるからです。

とはいえ、論議の中で、筆者は生産物価値の形成（または構成）という枠内の話でなら、具体的有用労働を価値移転労働と言い換えることは許されるとして、この議論を打ち切りました。

【補足】

筆者は、価値形成における労働の二重性についてマルクスがどう考えていたのか尚も気になり、後日、『資本論』の諸版を見比べてみました。その過程で、フランス語版の第1章「商品」の第2節「商品に表わされる労働の二重性」の後から二番目の段落に、この問題を考えるうえで参考になる記述を見つけました。長くなりますが、その段落の全文を引用して論じてみたいと思います。

「上述の結果、次のことが生ずる。すなわち、厳密に言って、二種類の労働が商品のなかにあるわけではないが、労働をその生産物としての商品の使用価値に関連づけるか、または、その純粋に客体的な表現としての商品の価値に関連づけるかにしたがって、その商品のなかで同じ労働が自己とは反対のものになる、ということ。どんな労働も一方では、生理学的な意味で人間労働力の支出であり、この同等な人間労働という資格において商品の価値を形成する。他方、どんな労働も、特殊な目的によって規定されるなんらかの生産形態のもとでの、人間労働力の支出であって、この具体的な有用労働という資格において使用価値あるいは有用性を生産する。商品が価値であるためには、商品はなによりもまず有用でなければならないのと同じように、労働が人間労働力の支出、言葉の抽象的な意味での人間労働と見なされるためには、労働はなによりもまず有用でなければならない」（『フランス語版資本論上巻』江夏・上杉訳 16 頁。アンダーラインは引用者による）

この段落では次のようなことが言われているように思います。

（具体的有用労働と抽象的人間労働という二種類の労働がそれぞれ独自に行使されて商品になるのではない。ただ一つの労働が行なわれるのであるが、この労働は、商品の使用価値という側面と関連づけられるなら具体的有用労働（使用価値あるいは有用性を生産する労働）として認められ、商品の価値という側面と関連付けられるなら抽象的人間労働（単なる人間労働の支出）と認められる）

ここでは価値移転ということは問題にはなっておらず、使用価値と価値という商品の二面的性格（あるいは

は二重的性格）と労働との関連が論じられているのですが、「二種類の労働が商品のなかにあるわけではない」という文章は、本章第3段落の「労働者は同じ時間に二重に労働するのではない」と重なるように思います。

さらにフランス語版の「不変資本と可変資本」（フランス語版は第8章）のこの部分を確認して見てみたところ、次のようになっていました。

「労働者は、同じ時間内に二重に労働するのではない。すなわち、一度は綿花に新しい価値を付加するために、もう一度は綿花の旧価値を保存するために、あるいは全く同じことになるが、彼が使用する紡錘の価値と彼が加工する綿花の価値とを糸という生産物に移すために、労働するのではない」（同前 119 頁。アンダーラインは引用者）

ここで目に留まったのは、ドイツ語版の岡崎訳では「一方では」「他方では」とあったのが、フランス語版では「一度は une fois」「もう一度は l'autre fois」となっていることです。そこでドイツ語ではこれらの語句がどうなっているか気になって確認したところ、「一方では」が einmal、「他方では」が das andremal となっていて、この二つの語句は「一度は」「もう一度は」と訳しうることが分かりました。いや、むしろこのように訳したほうが文意を正確に反映するように思われました。

「二重に労働するのではない」のニュアンスが「二度労働するのではない」という意味だとするなら、趣旨がハッキリします。すなわち、一度は新価値形成のために、もう一度は価値移転のために、というように二度労働が行なわれるのではないということが。新価値の形成と価値移転は、単一の労働の二面的性格から生じるという話にうまく繋がります。

ただ一つの労働なのですが、使用価値の生産という側面で照射されるなら具体的有用労働が浮かび上がり（抽象的人間労働という側面が捨象され）、価値の付加・創造という側面で照射されるなら抽象的人間労働が浮かび上がってくる（具体的有用労働という側面が捨象される）ということだと思われまます。したがって考察対象となる労働は、使用価値の生産および価値移転がテーマになるなら具体的有用労働として、価値の付加・創造がテーマになるなら抽象的人間労働として、取り扱われることになりまます（両者の関係が問題になるなら、視点の切り替えが必要になってきます）。



2 価値の付加(創造)と価値保存・移転との関係は労働の二面的性格からのみ正しく理解できる

要するに、同一労働の二面的側面(抽象的労働と具体的労働)によって二つの結果が生じるのです。

「労働の単に量的な付加によって新たな価値がつけ加えられ、つけ加えられる労働の質によって生産手段の元の価値が生産物のうちに保存される」(原書 216 頁)

そこでマルクスは「このような、労働の二面的な性格から生ずる同じ労働の二面的作用は、いろいろな現象のうちにはっきりと現われる」(同前)と述べ、考察を深めています。それは、労働の生産力(生産性)の変化は生産物価値の形成にどのような影響を及ぼすのかという問題です。

言うまでもなく労働の生産力は具体的有用労働に属する事柄です。紡績労働の生産力の増減および生産に入り込む生産手段の価値変化についての幾つかの組み合わせが検討されます。結果は次のようになります。

①紡績労働の生産性が増大または低下するが、綿花(原料)の価値には変化がない場合——生産力が増大する場合は、より多くの綿花が生産過程に入り込むので保存される価値が大きくなる。生産力が低下する場合は、より少ない綿花が入り込むので保存される価値が少なくなる。これに対し、同じ労働時間に付加される価値は不変である。

②紡績過程の生産性には変化がないが、この過程に入り込む生産手段(綿花や紡錘)の価値が上がるか下がるかする場合——どちらの場合も同じ時間に付け加えられる価値は同じであるが、保存される価値は前者の場合は多くなり、後者の場合は少なくなる。

③紡績過程の生産性にも綿花や紡錘の価値にも変化がない場合——不変の生産条件のもとでは、労働者が生産物のうちに保存する価値は彼がつけ加える新価値に正比例する(旧価値も新価値も労働時間に比例する)。

とはいえ、どの場合でも「相対的な意味では、いつでも労働者は新価値をつけ加えるのと同じ割合で元の価値を保存する」(原書 217 頁)という関係にあります。つまり、労働時間が長くなれば新価値が増大しその分だけ生産物に入り込む旧価値も増加します。反対に労働時間が短くなれば新価値が少なくなりその分だけ旧価値も減ります。



以上のことは、抽象的人間労働と具体的有用労働と

をハッキリと区分することによってのみ理解できることです。

3 生産手段はなぜ価値を失わないのか?

「価値は、価値章標での単に象徴的なその表示を別とすれば、ある使用価値、ある物のうちにしか存在しない」(原書 217 頁)

商品価値の価格表現の場合を除き、価値は使用価値なくして存在しえないということが言われています。使用価値は価値の担い手だということです。だから「使用価値がなくなってしまうと、価値もなくなってしまう」(同前)こととなります。例えば個人的消費の場合は、使用価値を消費してしまえば価値も消え去ってしまいます。ところが生産手段の場合は「その使用価値を失うのと同時にその価値をも失うのではない」(同前)というのです。それはどうしてでしょうか?

「というのは、生産手段が労働過程を通してその使用価値の元の姿を失うのは、じつは、ただ生産物において別の使用価値の姿を得るためでしかないからである」(同前)

生産手段は労働過程で消費されますが、それは生産物に姿を変えるための消費すなわち生産的消費です。だから生産手段としての使用価値を失ってもその価値は新たな担い手として生産物(使用価値)を見出すことができるのです。

ここに「価値にとっては、なんらかの使用価値のうちに存在するということが重要であるが、どんな使用価値のうちに存在するかは、商品の変態が示するように、どうでもよいのである」(同前)という文章がでてきますが、「商品変態」がなぜ価値移転の論理を補強することになるのか、との疑問が出されました。商品変態とは $W1 - G - W2$ であるが、 $W1$ が $W2$ に転換しても価値は各商品にくっついて行くのだから担い手が変わるとは言えないのではないか、価値がどんな使用価値のうちに存在するか「どうでもよい」ということの例証として商品変態が挙げられるのはピンとこない、と。

学習会ではハッキリしなかったのですが、筆者はその後、以下のように考えました。

$W1 - G - W2$ の実質的内容は $W1 - W2$ です。つまり社会的物質代謝です。 $W1$ は $W2$ に置き換わるのですが、これは $W1$ の所有者にとっては、 $W1$ の価値が $W2$ によって担われるようになったことを意味します。このように捉えれば、「商品変態」は、価値は使用価値を選ばないことの例証になりうるように思われますが、どうでしょうか。

4 生産手段の種類によって価値移転の仕方が異なる

「労働過程で価値が生産手段から生産物に移るのは、ただ、生産手段がその独立の使用価値といっしょにその交換価値をも失うかぎりでのことである。生産手段は、ただ生産手段として失う価値を生産物に引き渡すだけ」(原書 217 頁)なのです。

とはいえ、生産手段の種類によって価値の移転の仕方が異なります。

燃料用の石炭や潤滑油などの補助材料は、労働過程で一定の役割を果たしたのち消えてしまいます。原料は生産物の実体になりますが、形態を変えます。

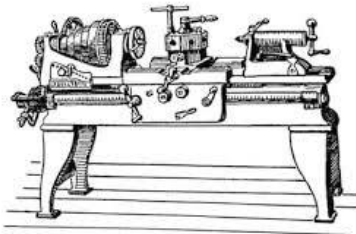
「原料や補助材料は、それらが使用価値として労働過程にはいつてきたときの独立の姿をなくしてしまうわけである」(原書 218 頁)

原料や補助材料は労働過程で消費され尽くし、その価値は全部生産物に移されます。

本来の労働手段はどうでしょう？

「用具や機械や工場建物や容器などが労働過程で役だつのは、ただ、それらのものが最初の姿を保持して明日もまた昨日とまったく同じ形態で労働過程にはいつて行くかぎりでのことである。それらのものは、生きているあいだ、労働過程にあるあいだ、生産物にたいして自分の独立の姿を保持しているが、それらが死んでからもやはりそうである。機械や道具や作業用建物などの死骸は、相変わらず、それらに助けられてつくられた生産物とは別に存在している」(同前)

原料などとは違い、労働手段は生産物とは別に独立の姿を保持し続けますが、寿命が来るまでの全期間にわたってみるなら、その期間中に完全に消費され尽くされ、その価値は完全に生産物に移転します。マルクスは、労働手段の損耗度と日々の使用価値喪失、それに応じて行なわれる生産物への毎日の価値引き渡し(価値移転)の計算の仕方を説明していますが、要するに徐々に価値喪失し、この度合いに応じて価値移転するものとして計算されることとなります。



5 生産手段は労働過程で使用価値の消滅によって失うよりも多くの価値を生産物に移さない

原料や補助材料の場合も労働手段の場合も「生産手

段は、労働過程でそれ自身の使用価値の消滅によって失うよりも多くの価値を生産物に引き渡すものでは」(原書 218 頁) ありません。

もし生産手段として利用されるものが天然物だとしたらどうでしょう？

「もしもその生産手段が失うべき価値をもっていないならば、すなわちそれ自身が人間労働の生産物でないならば、それはけっして生産物に価値を引き渡しはしないであろう。その生産手段は、交換価値の形成者として役だつことなしに、使用価値の形成者として役だつであろう」(同前)

マルクスは、このような生産手段として「土地や風や水や鉱脈内の鉄や原始林の樹木など」を挙げています。

6 労働過程には全体としてはいるのに価値形成過程には一部分しかはいらない生産手段、労働過程には一部分しかはいらないのに価値形成過程には全体としてはいる生産手段

マルクスは「もう一つ別の興味ある現象」(原書 219 頁)を提示します。

機械のような本来の労働手段にのみ生じる事象です。機械の全体が日々の労働過程に入り込んで機能するのですが、価値は少しずつ生産物に移されます。そこでマルクスは言います。

「労働過程のある要因、ある生産手段は、労働過程には全体としてはいるが、価値増殖過程(*フランス語版は「価値形成過程」—引用者)には一部分しかはいらないということがわかるのである。労働過程と価値増殖過程(価値形成過程)との相違がここではこれらの過程の対象的な諸要因に反射している。というのは、同じ生産過程で同じ生産手段が、労働過程の要素としては全体として教えられ、価値形成の要素としては一部分ずつしか数えられないからである」(同前)

*以下、「価値増殖過程」は「価値形成過程」に置き換えます。

気を付けなければならないことは、ここでの「価値形成」には価値付加(価値創造)と価値移転の両方が含まれていることです。そして生産手段の価値は生産物価値のうちの移転部分に関わります。

機械は労働過程に丸ごと入り込むのですが、その価値の一部しか生産物に移しません。機械は「労働過程には全体としてはいるが、価値形成過程には一部分しかはいらない」(同前) こととなります。

ここに注 21 がありますが、後半部分(修理労働についての部分ではなく、リカードに関わる部分)が分か

りにくいとの発言がありました。

一足の靴下の価値には靴下製造機を製作するときにつけ加えられた機械製作工の労働量の一部分が含まれているというリカードの見解に対し、『経済学における或る種の用語論争の考察、特に価値および需要供給に関して』の著者（ブルーム）は「しかし、どの一足の靴下を生産した総労働も……機械製作工の全労働を含んでいるのであって、ただ一部分だけを含んでいるのではない。なぜならば、一つの機械が何足もつくるにはちがいないが、そのうちのどの一足も、機械のどの部分かがなければ（どの部分が欠けても—引用者）つくれなかったであろうからである」と批判を加えています。

靴下の価値には機械製作工の労働量の一部分が含まれるというリカードの見解は価値形成の面では間違っていないのですが、リカードには労働の二面性の見地が欠けており、したがって靴下製造の過程（労働過程）には機械全体が入り込むことを見ていないことを突いている限りでは、この著者の批判は当たっているということでしょう。

他方、機械とは反対に「ある生産手段は、労働過程には一部分ずつしかはいらないのに、価値増殖過程（価値形成過程）には全体としてはいることがある」（同前）とマルクスは言います。紡績の原料となる綿花に生じるようなケースです。紡績過程では、綿くずが出るのは避けられません。115 ポンドの綿花から 15 ポンドの綿くずが出るとしましょう。

「100 ポンドの糸をつくるためには、15 ポンドの綿花の使用価値がちりにならなければならない。だから、この綿花の廃物化は糸の生産の一つの条件なのである。それだからこそ、それはその価値を糸に引き渡すのである」（原書 220 頁）

この場合、糸の実体になる 100 ポンドの綿花だけでなく、要素にならない 15 ポンドの綿花の価値も 100 ポンドの綿糸に移されることになります。すなわち、労働過程には一部分しかはいらないのに、価値形成過程には全体としてはいることになります。

どちらの場合も、生産手段から生産物に移される価値は「労働過程にはいるときにもっていた元の価値量によって、すなわち自身の生産に必要な労働時間によって、制限されて」（同前）います。ただし、どれだけの価値が移されるかは「それが生産手段としてはいつて行く労働過程によってではなく、それが生産物として出てくる労働過程によって決定されている」（同前）とあります。それは、生産手段によって損耗の仕方や度合いが異なるからでしょう。

「この過程にはいつてくる前に価値をもっていなか

ったならば、それは生産物に少しも価値を引き渡しはしないであろう」（同前）という文章に長い注釈（注 22）がたまります。この注も分かりづらいです。

J. B. セーは、剰余価値（利子、利潤、地代）を、生産手段、つまり土地や用具や革などが労働過程でその使用価値によって果たす「生産的な役だち」〔“services productifs”〕から導き出すという愚論をまき散らちます。具体的に見ると、搾油機が(!)新たに生み出す価値と搾油機そのものをつくるための価値（移転価値）から成っていると云います。ロッシヤー（歴史学派）はこのセーの説を「正しい」として擁護するのですが、新価値と旧価値を区別する限りで正しいに過ぎません。セーが搾油機が価値を生み出すという主張に至っては全くの誤りですが、この誤りは不問です。というのはセーと同じように、交換価値と労働との関係を理解していないからです。ロッシヤーは「油」が価値をもっていることから、価値（交換価値）とは「油」のようなものだと考えるのですが、その一方で天然に存在するのだから自然は価値を「ほとんど生み出さない」とも言うのです。価値が油のようなものとするなら、それが天然物であっても価値を持たなければならぬはずで

マルクスは「ロッシヤーの自然と交換価値との関係は、愚かな娘と『ほんの小さなものだった』子供との関係のようなものである」と喝破します。これはどういう比喩なのか分からないとの発言がありました。

ロッシヤーにあつては、自然と交換価値との区別はあいまいで、同じようなものです。愚かな娘も「ほんの小さなものだった」子供も無知という点では区別が付きません。ロッシヤーにおいて自然と交換価値との区別があいまいだという点で、愚かな娘と小さな子供との関係のようなものだということが言われているのだと思います。

（本章はまだ続きます。次回は第 17 段落から）

（雅）

